

江東のひと

東京都現代美術館
チーフキュレーター

長谷川祐子さん

アーティストやクリエイターと一緒に 作品を創造していく面白さに魅了される

美術館で展覧会やイベントの企画に携わる人々を、一般に「学芸員」と呼び、最近では「キュレーター」という肩書きもよく耳にします。

長谷川さんがキュレーターを目指すようになったのは、東京藝術大学在籍時とのこと。「当時、芸術学科で美術史を学んでいたのですが、プログラムがとてもユニークで、制作の実習をしたり、実技の学生と交流する機会が多くあったりしたんです。」

そんな理想の環境で学ぶうちに、「アーティストと一緒に仕事ができたら」、という

願望がどんどん膨らみ、たどり着いた先が、学芸員の業務にプロデューサーの役割を備えた「キュレーター」だったとのこと。

大学院課程を修了した翌年の水戸芸術館現代美術センターオープンと同時に、長谷川さんは、キュレーターとしての第一歩を踏み出しました。

個人個人の「多様性」を 現代アートを介し世に問う

世田谷美術館在籍時の1997年には、ジェンダー(社会的な性のあり方)に関する企画展「デ・ジェンダリズム



海外で活躍するマイケル・リンさんのデザインによる授乳室(写真)をはじめ、館内各所でモダンアートが“発見”できます。



Profile

多摩美術大学美術学部芸術学科特任教授、同芸術人類学研究所所員。1979年京都大学法文学部卒業。1989年東京藝術大学大学院修了。水戸芸術館現代美術センター、世田谷美術館を経て、1999年より金沢21世紀美術館の立ち上げに参加。2001年イスタンブールビエンナーレ総合コミッショナー、2002年上海ビエンナーレ共同キュレーター、メディアアシティソウル2006の共同キュレーターを務める。

「回帰する身体」をプロデュース。アーティスト自身の父親と母親を外見的に、スイッチして写真を撮るなど、性差にとられない人間の「多様性」を世に問い、大きな反響を呼びました。

「この企画展は、『女性らしさ』『男性らしさ』というものを多方面から問いただしてみることが狙いでした。男性でも小柄で繊細なタイプの方が結構いるように、体格も容姿も思考も人それぞれです。ですから、固定観念にとらわれず、自由に男性らしさ、女性らしさを取り込んでいけばいいのではないのでしょうか。」

現代アートを媒介としてありのままの自分を見つめることを呼びかけた長谷川さん。その後、金沢21世紀美術館の立ち上げに携わり、誰もが気軽に楽しめる、敷居の低い美術館として人々の共感を獲得。そして2006年4月、東京都現代美術館のチーフキュレーターに就任されました。

さまざまな可能性を見出す アートのチカラ

今年29日より来年1月30日まで「東京アートミーツイン

グランスフォーメーション」という企画展を人類学者の中沢新一さんとのコラボレーションにより開催。他ジャンルを横断しながら現代アートに新たな視点を導入しようと試みています。

「例えば、科学は実証が不可欠ですが、アートは仮説を視覚化することで、その可能性を見出せます。そうした思考の伸びやかさを備えている点がアートの長所であり、面白いところですね。」

生身のコミュニケーションが 何よりも大切

携帯電話やパソコンなど間接的な接触が主流となつているなかで、「美術館は、自身自身のセンサーを回復するのにとってもいい場所なんです」と長谷川さんは笑みを浮かべます。

「当館は天井が非常に高く、通常の美術館より空間が広いので、想像力をくすぐる立体的な展示物にたくさん出会えます。実際に足を運んでみて、物や人に触れ、対話を重ねてみませんか。きっと、本当の自分が見えてきますよ」と、最後に念を押されました。

男女共同参画に関する

シンボルマーク

男女共同参画の重要性をアピールするものとしてさまざまなシンボルマークがあります。ここでは主なものをご紹介しますので、ぜひみなさんもこの機会に覚えてみてください。



男女共同参画

男女共同参画シンボルマーク

男女が手を取り合っている様子をモチーフにし、互いに尊重しあい、共に歩んでいけたらという願いをこめています。



女性に対する暴力根絶のためのシンボルマーク

女性が腕をクロスさせた姿を描いており、女性の表情、握りしめたこぶし、クロスさせた腕により、女性に対する暴力を断固として拒絶する強い意志を表しています。



ポジティブ・アクション普及促進のためのシンボルマーク 愛称:「きらら」

ポジティブ・アクションの頭文字「p」と「a」を組み合わせて、創造と活力あふれる女性の姿がデザインされています。

※ポジティブ・アクションとは、弱者集団、特に女性の職場環境の不利な現状を是正するための改善措置のこと。

守るう人権 講演とメッセージのつどい

日時

12/3(金) 13時30分~17時(開場13時)

会場

江東区文化センターホール(東陽4-11-3)

内容

- ①人権メッセージ発表会
(第六砂町小学校5年生代表)
- ②講演
「心の“ホーム”を求める子どもたち
~いじめの連鎖を断つために~」
講師 北村年子
(ルポライター、「ホームレス」問題の授業
づくり全国ネット共同代表)
- ③映画 人権啓発アニメーション「声を聞かせて」

定員

※手話通訳付。保育有(1歳半~未就学児)11/25(木)まで要予約。
保育予約・問合せ先 人権推進課3647-1164



▲講師 北村年子さん(ルポライター)

同時開催 北朝鮮当局による拉致問題パネル展

北朝鮮に拉致された可能性のある特定失踪者「後藤美香さん」、「高野清文さん」のご家族が区内に在住されています。お二人のパネルもごさいますので、是非ご覧いただき北朝鮮による拉致問題に対する関心と認識を深めてください。